

第 50 回日本臨床細胞学会春期大会

ラブドイド形質を伴う肺大細胞癌の一例

(財)福島県保健衛生協会¹⁾、公立大学法人福島県立医科大学附属病院呼吸器内科²⁾、同 臨床腫瘍センター³⁾、同 呼吸器外科⁴⁾、同 病理部⁵⁾ (財)慈山会医学研究所附属坪井病院⁶⁾ 鈴木御幸¹⁾、添田喜憲¹⁾、栗田和香子¹⁾、柴田眞一¹⁾、金澤賢也²⁾、田中瑞子⁵⁾、大杉純⁴⁾、鈴木弘行⁴⁾、石田卓^{2,3)}、森村豊^{1,6)}

【はじめに】肺大細胞癌の稀な一亜型であるラブドイド形質を伴う大細胞癌の一例を経験したので報告する。

【症例】45歳、男性、喫煙指数：750。血痰を主訴とし、胸部単純X線とCT所見にて右上葉の異常陰影を指摘された。右B_aの擦過細胞診にて、腺癌が強く疑われたため、右上葉切除術を施行した。その結果、ラブドイド形質を伴う大細胞癌 pT2N0M0 stage I B と診断された。

【気管支擦過細胞診所見】出血性背景の中、散在性にN/Cが高く、核偏在傾向を示す異型細胞が出現していた。核は類円形ないし不整形で大型核小体を有しており、低分化腺癌が強く疑われた。術後、再鏡検にて、二核の細胞やLG好染の豊富な細胞質に硝子様小球体を有す細胞が少数認められ、Giemsa染色標本でも細胞質内に淡染性の小球体が認められた。

【病理組織学的所見】腫瘍は、2.2×1.0 cm大で、内部が壊死に陥っており、空洞化していた。腫瘍細胞は、結合性に乏しく、充実性に増殖しており、多形性が強く、多核巨細胞化している像や核分裂像を随所に認め、細胞質にスリガラス状の好酸性小球体globuleを有すラブドイド形質を伴っていた。また、一部に細胞質が淡く、核小体明瞭な明細胞癌に類似した成分が認められたが、明らかな腺構造は見られなかった。PAS染色(-)、ALB染色(-)、免疫染色では、vimentin(+)、AE1/3一部(+)、CD56(-)、TTF-1(-)、chromogranin(-)であった。

【まとめ】ラブドイド形質を伴う大細胞癌は、通常の大細胞癌と比較して予後不良とされている。ゆえに、鑑別診断は重要であり、細胞診の段階で本症に特徴的な細胞所見を捉えることができれば、早期により正確な臨床診断が可能になると考える。